活動記録

ひょうご歴史研究室は、平成二七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された。

室の構成メンバーは、博物館長を室長兼務、次長を副室長兼務とし、そのほか館内外の博物館・資料館の学芸員・職員や市町の文化財担当者、大学関係者、民間団体研究者などを参与・研究員として協力をあおぎ、また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・事務スタッフ（三島伊都子氏県政推進事務員。九月から川戸信雄に交代）の各一名を配置して、総勢二〇名以上で成り立っている（詳細は後掲一五七頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

研究の基本方針を討議するコア会議、全体会会議の開催を経て、室の当面の研究テーマを、①播磨国風土記、②赤松氏と山城、③たたら製鉄、の三つにするという方針が立てられ、その遂行のため、三つの研究班が編成された。

昨年度は、編纂から一三〇〇年を迎えた『播磨国風土記』研究、本年度は赤松氏と山城研究に、重点的に取り組んだ（各研究班の現地調査活動については後掲一五八頁以下の一覧表を参照のこと。ただし創刊号に掲載できなかった昨年度の調査活動分も含む）。

以下、研究室の今年度の活動概略、研究成果等について紹介する（敬称を略した箇所がある）。

（1）研究活動（彙報）

■「播磨国風土記」研究班

◇平成二八年六月一八日（土）午前

県立歴史博物館会議室

第一回研究会（出席者一五名）

「古代の淡路島とアメノヒボコ伝承」　古市　晃

〔討論〕

アメノヒボコが但馬を代表する勢力であることに関わり、但馬国内や豊岡盆地における古墳分布の問題などに議論が集中した。その中で砂鉄が出土している四世紀代の入佐山古墳の重要性、朝来郡内の大型古墳の分布とアメノヒボコ伝承との整合的な解釈の必要性などが指摘された。またアメノヒボコ伝承と淡路島との関わりでいうと、鉄関連の遺物が出土している南あわじ市の「木戸原遺跡」が重要との認識も示された。

古市氏は、淡路島とアメノヒボコ伝承、あるいはヤマトの葛城勢力との関わりについては、今後も集中的な研究対象にしたいと述べ、そのためには地元研究者の連携が不可欠になると述べた。

研究会の後、風土記研究班の今後の企画として、九月に県立考古博物館との共催企画として、「播磨国風土記」の特別陳列展と、ひょうご歴史文化フォーラムの開催、また一一月に明治大学との共催行事として、東京にて風土記関連のシンポジウムをおこなう予定の計画案が示され、原案とおり了承された。なお本研究会には、たたら・製鉄研究班のメンバー一名と、考古博物館の学芸員一名も参加した。

◇平成二八年一〇月一五日（土）
県立歴史博物館会議室
第二回研究会（出席者一〇名）
「播磨国風土記写本調査報告（承前）」　垣内　章
「志深ミヤケの歴史的位置」　坂江　渉

〔討論〕
今年度から当班メンバーに加わった垣内章報告については、同氏が龍野歴史文化資料館で発見した『播磨国風土記』写本（出田冨祇筆写）の性格や、風土記「受容」の時代背景をめぐり議論が行われた。垣内氏によると、出田は「夜比良神社」の神官であるとともに、揖西郡今市村の庄屋家の出身だが、資料断片から、風土記の地名情報が、明治二二年施行の町村制の新村名の根拠として利用された可能性があるといい、これも風土記「受容」の一形態だと述べた。また飯島實本『播磨風土記』（伊和神社）については、伊和神社の社格昇格運動と関連すると指摘した。

坂江報告に関連して、加古川水系と丹波・但馬方面での蘇我氏の動きについては、かつて県が調査発掘した曽我井遺跡（多可町中区）の「蘇我」系墨書土器の歴史的意義と、それを交通路との整備の問題と結びつけて考えるべきとの意見がだされた。また『日本書紀』敏達一三年（五八四）是歳条に載る「高麗の恵便」は、蘇我氏に関連する僧侶と思われるが、この恵便については、多可町八千代区中村の「安海寺」に伝恵便像（丈六の仏像。平安後期）と関連伝承が残されており、これらにも眼を向けるべきではないかという指摘があった。第三回研究会は、平成二九年一月二八日に開かれることが決まった。

■「赤松氏と山城」研究班

◇平成二八年六月五日（日）
県立歴史博物館会議室
第一回研究会（出席者一二名）
「赤松館と周辺施設について」　大村　拓生

〔討論〕
大村報告については、①赤松氏の嫡流意識という場合、それは円心を始祖とするものか、則祐を始祖とするものか、②「白旗城」という命名をいつと考えるか、③前期赤松氏は積極的に「インフラ整備」をやっているようにみえるが、それは宗教的

な拠点の維持、整備策ではないか、などの意見が出された。

また今年度、上郡町によって試掘調査が行われる「赤松居館跡」について、かなり長期的な視野でみる必要があること、またその為には、『上郡町史』の編纂過程等で収集された近世の文献資料などにも眼を向けることの重要性などが指摘された。さらに小林客員研究員から、秋以降、大手前大学史学研究所とひょうご歴史研究室との共催企画という形で、前期赤松氏をめぐるシンポジウムを開催したいとの提起がなされ、了承された。

◇平成二八年一〇月八日（土）

県立歴史博物館会議室

第二回研究会（出席者一二名）

「赤松居館跡の測量平面図と今後のトレンチ調査計画」　島田　拓

「赤松館関連絵図調査の報告」　大村　拓生

〔討論〕

討論では、トレンチ調査にあたり上郡町教委が事前に測量した赤松居館跡の平面図と、大村氏が調査した当該地の「明治九年十月赤松村地図」資料にもとづき、地形環境分析、道路のあり方、礎石・土塁・築地塀等や「都市的空間」の存在の有無をめぐり活発な議論がされた。このほか『ひょうご歴史研究室紀要』第二号の特集号の内容、一二月一七日に共催する予定の赤松氏シンポの中身、さらには年度末三月四日の成果発表会の陣容と中身について、討議・確認された。

■「たたら・製鉄」研究班

◇平成二八年六月一八日（土）午後

県立歴史博物館会議室

第一回研究会（出席者一〇名）

「播磨におけるたたら・製鉄研究史覚書」　大槻　守

「近世千種鉄関係資料とその課題」　伏谷　聡

〔討論〕

たたら・製鉄研究班の今年度一回目の研究会が開かれ、大槻報告では、たたら製鉄をめぐる研究史の課題が整理され、伏谷報告では、関連する文献資料をめぐる研究到達点と課題とが提示された。討論では、出雲・石見などと比べた播磨の関連史料の少なさが指摘された。今後、『山崎町史』において調査・把握されている、近世の鉄山の稼働状況を知った上で、さらに宍粟市内の『千草屋手控帳』と、平瀬家所蔵の古文書類、および宇野氏収集の資料ダータの確認・調査が重要になるという意見が出された。

◇平成二八年一一月二三日（水）

県立歴史博物館会議室

第二回研究会（出席者一二名）

「中国地方における近世製鉄業の概要」

笠井　今日子

〔討論〕

まず基本事項に関する質問に対して笠井氏は、①調査素材となった古文書数は約一万点、②製鉄による完成品は、日本刀のほか、船の碇もあるが、庶民の日常製品である農具、鍋、釜などにも用いられていた、③大坂には鉄仲買がいて基本的な消費地はここだと考えられ、また大坂で二次加工されていたとも考えられる、④摂津の兵庫津で石見鉄が「抜け荷」された痕跡があり、また播磨の場合、三木が大きな加工地だったと推定される、などと答えた。

つぎに報告内容と今後の研究の方向性をめぐり、⑤明治七年の「県物産表」資料によると、当時の餝磨県の鉄生産量は全国第七位となるが、このデータに信憑性をおけるのか、⑥たたら製鉄用の木炭の素材は、マツではなく、クヌギなどの雑木であったこと、⑦たたら製鉄場と近世幕藩領主権力との関連については、領主側が「株」を与えていたといっても、たたら側が上から下まで縛られていたのではなく、出るもの（冥加金）だけを抑えていた体制として見るべきこと、⑧近世播磨の製鉄は、石見・出雲のような大規模生産・流通体制ではなく、国内で「ゲリラ」的に生産され、生産物は「ブランド」を付けさせるために、一元的には宍粟郡の千種に廻されていたのではないか、⑨石見・出雲のような近世史料群に恵まれていない播磨のたたら製鉄の研究にあたっては、播磨だけでなく、但馬地域などにも注目し、さらに鉄だけでなく、銀や銅にも眼を向けるべきではないか、などの意見がだされた。

（2）コア会議、全体会

◇平成二八年四月二三日（土）

第一回コア会議（出席者一二名）

〔出席〕藪田貫／豊田幸雄／中元孝迪／坂江渉／村上裕道／山下史朗／大村拓生／大槻守／藤田淳／神戸佳文／村上泰樹／大谷輝彦

〔概要〕

平成二七年度の事業のまとめと、平成二八年度の事業方針案が原案とおり承認され、七月二日の全体会にて説明することが決まった。

◇平成二八年七月二日（土）

第一回全体会（出席者二三名）

〔出席〕藪田貫／豊田幸雄／坂江渉／大村拓生／村上裕道／神戸佳文／藤田淳／大槻守／大谷輝彦／村上泰樹／古市晃／高橋明裕／垣内章／大平茂／藤木透／小林基伸／堀田浩之／山上雅弘／島田拓／相田愛子／伏谷聡／田路正幸／笠井今日子

〔概要〕

平成二七年度の事業のまとめと、平成二八年度の事業方針案にもとづく三つの研究班の計画が討議され、原案とおりすべて承認された。当初の予定とおり、今年度は「赤松氏と山城」研究班が集中的に研究をすすめ、その成果を、年度末のフォーラムと紀要第二号などで公表することになった。

◇平成二八年一二月一八日（日）
第二回コア会議（出席者一一名）
〔出席〕藪田貫／豊田幸雄／坂江渉／大村拓生／村上裕道／山下史朗／大槻守／藤田淳／小林基伸／村上泰樹／大谷輝彦
〔概要〕
平成二八年度の三つの研究班の活動実績と当面のスケジュール案が原案とおり承認され、来年度の各班の研究方針案は、一月以降の研究班で討議することが了承された。来年度の各班の研究方針案は、来る二月二五日の第二回全体会で議論される予定である。

（3）研究成果の公表

①『播磨国風土記』（複製品）全巻特別陳列

◇平成二八年九月一〇日（土）～九月二五日（日）
〔概要〕
昨年度、県立歴史博物館では、編纂一三〇〇年を記念して、三条西家本の『播磨国風土記』を、前後半二回に分けて展示した。観覧者からは、全巻まとめてみたいこと、関連する考古資料も含めた展示会を開催してほしいとの要望が寄せられた。そこで今年度は、県立考古博物館の協力を得て、九月一〇日から約半月間、同館の特別展示室にて全巻展示した。
第Ⅰ部では、風土記の複製品と解説パネルや翻刻文を、第Ⅱ部と第Ⅲ部では、関連する考古資料を展示し、最新の研究成果を紹介した。会期中の観覧者数は合わせて一六六四名。四回開いたギャラリートークについては、九月一〇日が二〇名、一八日が一二名、二五日には約六〇の方々が集まった。
集計したアンケート調査によると、展示について「良かった」という評価をした人が九割以上に登り、県民の風土記に対する関心の高さをあらわした。

②ひょうご歴史文化フォーラム「播磨国風土記と古代の交通路」

◇平成二八年九月一七日（日）
〔概要〕
県立歴史博物館が、兵庫の歴史ファンが集う場、地域史研究者の意見・情報交換の場として、年に一度開いている「ひょうご歴史文化フォーラム」を、右の『播磨国風土記』（複製品）全巻特別陳列の関連企画として、県立考古博物館の講堂で開催した。このフォーラムは、「播磨国風土記」

研究班による研究成果の発表の場としても催された。

まず坂江渉が、「歴史学からみた風土記の『交通障害神』説話と倭王権」、県立考古博物館学芸員の中村弘氏が、「考古学からみた風土記時代の道と駅」と題する講演をおこない、その後、約一時間かけて公開討論をおこなった（総合司会は村上泰樹研究員。司会は高橋明裕客員研究員と山下史朗兵庫県教育委員会文化財課副課長）。

公開討論は、会場からの質問用紙も踏まえてすすめられ、風土記の神話や伝承は、どの時代まで遡りうる史料なのか、坂江講演で分析された六世紀代の考古資料としては何があるのか、「荒ぶる神」の鎮祭伝承の比定地をどうみるか、などの点について、白熱した討論がおこなわれた。

総じて風土記という歴史資料の位置づけや研究方法をめぐり、文献史学と考古学との間には、少なくないズレがあることが浮き彫りになった。

当日は悪天候であるにもかかわらず、二六〇名以上の聴講者が集まり、回収したアンケートでは、「歴史学と考古学の最新の情報を得られて、風土記への興味が深まった」「歴史学と考古学による「対決」という形の企画が新鮮だった」「文献史学と考古学の学問的アプローチに大きな違いがあることを感じた」「地域に根ざしたフォーラムだったので良い企画だったと思う」「今後もタイムリーな企画を催していくべきだ」などの感想が寄せられた。

③公開シンポジウム「『播磨国風土記』研究の現代的意義」

◇平成二八年一一月一二日（土）

〔概要〕

明治大学日本古代学研究所が主催し、ひょうご歴史研究室と県立考古博物館が共催する公開シンポジウム、「『播磨国風土記』研究の現代的意義」が、一一月一二日、東京の明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント一階の多目的室にて開かれた。

これは前年度来、ひょうご歴史研究室がすすめている『播磨国風土記』研究に着目した同研究所の吉村武彦名誉教授が、その研究成果を広く県外にも情報発信する場を設け、関係機関同士の共催企画として開催したらどうかとの提案があり、それにもとづき実現したものである。

当日は、まず英国出身でニュージーランド在住の日本文学研究者のエドウィーナ・パーマー氏が、交差配列法や隠れた掛け言葉の多用など、『播磨国風土記』には、口承文学資料として、世界遺産的な価値が認められると指摘。これを受けた坂江渉が、パーマー氏のいう口承文学は、各地の祭祀の場で、神話の一部として語られていたのではないかと指摘した。このほか、古市晃・神戸大学准教授、吉村武彦・明治大学名誉教授、和田晴吾・県立考古博物館長も講演し、その後、五人のパネリストによる公

開討論がおこなわれた。

討論は、パーマー氏の見解を軸にしてすすめられ、上代特殊仮名遣いの「甲類」と「乙類」の違いはどこまで遵守されていたのか、口承資料を文字化する時に現れる播磨的特色は何か、播磨の国内統一を体現する伊和大神勢力をどうみるか、あるいは文字資料を解釈する際の客観的基準をどこに置くかなどの点が議論され、学際的で新しい研究成果を発信する場に相応しいシンポジウムになった。当日の参加者は合わせて一一五名だった。

④シンポジウム「赤松氏研究の新展開　―権力確立の過程をさぐる―」

◇平成二八年一二月一七日（土）

〔概要〕

大手前大学史学研究所が主催し、ひょうご歴史研究室が共催するシンポジウムが、大手前大学さくら夙川キャンパス内で開かれた。これは、「赤松氏と山城」研究班が、昨年度以来つづけてきた共同研究の成果発表の場の一つとしての意味をもつ。

報告は、まず市澤哲氏（神戸大学教授）が「一四世紀の内乱と赤松氏の台頭」と題する報告をおこない、赤松氏の出自をめぐる研究史や、護良の側近としての挙兵の特質、『太平記』の史料としての可能性などについて論じた。

前田徹氏（県立歴史博物館主査）の報告、「播磨国竹万荘と赤松円心の遺領配分」では、従来、不明だった竹万荘が山陽道の貫通する交通の要衝であったことを明らかにされ、それが赤松貞範に譲与された意味、鎌倉期の関東御領であったことなどが論じられた。

大村拓生氏は、「赤松氏の拠点形成―白旗城・法雲寺・宝林寺―」というテーマの報告をおこない、白旗城という呼称の持つ足利将軍家との関係、法雲寺建立と鎌倉期に播磨守護代だった小串一族との関係、赤松則祐の家督継承と宝林寺の赤松地区造営の意味について述べた。

馬田綾子氏の報告、「守護赤松氏の領国支配　―『国衙眼代』小河氏をめぐって―」は、赤松氏と国衙機能との関係について、まるごと包摂したとみる従来の史料解釈は誤りで、小河氏はもとから赤松被官であり、「国衙眼代職」は国衙領の代官という意味で、一三八〇年代には、すでに赤松氏は国衙機能を吸収していたことを明らかにした。

休憩の後、参加者（約一七〇名）から寄せられた質問用紙をもとに、小林基伸氏（大手前大学教授、ひょうご歴史研究室客員研究員）の司会で質疑が行われ、それぞれの論点が深められた。さいごに藪田貫室長が閉会の挨拶を述べ、三月四日開催予定の歴史研究室研究成果発表フォーラムについても紹介した。専門研究者の参加は少なかったが、報告、討論を通じて、前期赤松氏研究を一段

階すすめるものとなった。

⑤成果発表フォーラム「赤松氏研究の新展開　―発祥の地、赤松から考える―」

◇平成二九年三月四日（土）

〔予定〕

研究室が今年度集中的に取り組んできた「赤松氏と山城」研究の成果を県民向けに分かりやすく公表する目的で、以下の内容で、成果発表フォーラムをおこなう予定である。講演（一）島田拓「赤松館跡試掘調査の成果と課題」、講演（二）山上雅弘「城郭史からみた白旗城」、講演（三）大村拓生「文献史からみた赤松地区」の後、小林基伸客員研究員を司会役として、約一時間の公開討論を実施。会場は県立歴史博物館ホール（定員一〇〇名）。大手前大学史学研究所と上郡町教育委員会の後援。

⑥ホームページの更新

昨年秋、情報発信のツールの一つとしてホームページを開設している。催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や成果発表について取り上げ、今年度も情報の更新につとめた。公開ＵＲＬはつぎのとおりである。http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekiken/

（以上、すべて文責は坂江渉）

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

（設　置）

第１条　兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」（以下「研究室」という。）を置く。

（場　所）

第２条　研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

（所掌事務）

第３条　研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

⑴兵庫県内の歴史に関する調査・研究に関すること。

⑵調査・研究成果の普及に関すること。

⑶調査・研究成果の活用に関すること。

⑷その他兵庫県の歴史研究に関すること。

（組　織）

第４条　兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

２　室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

（庶　務）

第５条　研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

（補　則）

第６条　この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附　則

この要綱は、平成27年４月１日から施行する。

平成28年度　ひょうご歴史研究室　構成メンバー一覧（敬称略）

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー 】

室長	藪田　貫	兵庫県立歴史博物館館長
副室長	豊田　幸雄	兵庫県立歴史博物館次長
参与	中元　孝迪	播磨学研究所所長、兵庫県立大学特任教授
研究コーディネーター	坂江　渉	兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
☆歴史研究推進員	大村　拓生	兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
研究員	神戸　佳文	兵庫県立歴史博物館館長補佐
研究員	藤田　淳	兵庫県立考古博物館学芸課長
客員研究員	大槻　守	香寺町史研究室主宰
☆共同研究員	大谷　輝彦	姫路市教育委員会文化財課課長補佐
県教委事務局	村上　裕道	兵庫県教育委員会事務局参事兼文化財課長
県教委事務局	山下　史朗	〃　文化財課副課長兼文化財班長

【播磨国風土記研究班】

◎研究員	村上　泰樹	兵庫県立考古博物館社会教育推進専門員
研究コーディネーター	坂江　渉	再掲
研究員	神戸　佳文	再掲
研究員	藤田　淳	再掲
客員研究員	古市　晃	神戸大学大学院人文学研究科准教授
客員研究員	高橋　明裕	立命館大学文学部非常勤講師
☆客員研究員	垣内　章	播磨学研究所研究員
共同研究員	大平　茂	前三木市立金物資料館長
共同研究員	藤木　透	佐用町教育委員会教育課企画総務室室長補佐
☆共同研究員	大谷　輝彦	再掲

【赤松氏と山城研究班】

◎客員研究員	小林　基伸	大手前大学総合文化学部長（史学研究所所員）
研究員	堀田　浩之	兵庫県立歴史博物館学芸課長
研究員	山上　雅弘	兵庫県立考古博物館学芸課担当課長補佐
共同研究員	藤木　透	再掲
☆共同研究員	大谷　輝彦	再掲
☆共同研究員	島田　拓	上郡町教育委員会教育総務課文化財係学芸員
歴史研究推進員	大村　拓生	再掲

【たたら・製鉄研究班】

◎客員研究員	大槻　守	再掲
研究員	相田　愛子	兵庫県立歴史博物館主査（～28.12.31）
研究員	村上　泰樹	再掲
共同研究員	伏谷　聡	兵庫県企画県民部管理局文書課文書管理班非常勤嘱託
共同研究員	田路　正幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課長兼歴史資料館長
☆共同研究員	笠井今日子	西宮市立郷土資料館学芸員

・・・・・・・・・・・・

県政推進事務員	三島伊都子	兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室（～28.8.31）
県政推進事務員	川戸　信雄	兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室（28.9.1～）

◎：各研究班リーダー、☆：平成28年度新規

平成27年度　ひょうご歴史研究室　現地調査一覧（承前）

1　播磨国風土記研究班

調査日	調　査　地	調　査　内　容
２／４	たつの市立埋蔵文化財センター（たつの市新宮町宮内）、兵庫県立考古博物館	・播磨国風土記に関連する記述を残す大上宇市（たつの市新宮町出身の博物学者）の関連資料の実見調査し、たつの市立埋蔵文化財センターを訪れ、「特別展・大上宇市のあしあと」を見学した。大上宇市が書いた『播磨国風土記』の註釈書「標注古風土記」を直に見学することにより、揖保郡の地名比地と鉱物資源をめぐる新しい解釈に接することができた。 ・古代播磨の新しい発掘物を展示する兵庫県立考古博物館を訪れ、「平成27年度冬季企画展・ひょうごの遺跡2016－調査研究速報」の見学を通して播磨国内や淡路島などをめぐる前近代遺跡の知見を得ることができた。（調査者：坂江渉コーディネーター）
２／26	高巌山（標高278m）南岩の磐座、権現山の磐座（巨岩）・同山龍王社（巨岩）の祠（磐座神社の奥の院）、同厨子（十一面観音像等を安置、矢野町森の磐座神社	・播磨国風土記の「石神」信仰の特質と、赤松氏と山城研究班が研究する中世矢野荘の神仏習合の特質を探るため、磐座（巨岩）信仰と神仏習合の痕跡が残る、相生市矢野町の榊・森地区の高巌山・龍王社•磐座神社の現地調査を行った。 ・登山道は、イノシシによる獣害等により、かなり荒れていたが、苦労しつつ踏み跡を確認しつつ，当初の予定を達成することができた。古代～中世播磨の赤穂郡（相生市域）の「石神」信仰の具体像、及び神仏習合の古い痕跡を確認することができた。（調査者：坂江渉コーディネーター、高橋明裕研究員、大村拓生研究員）
３／11	和田山町加都遺跡（和田山IC付近） ・道路遺構（仮称但馬道）、物部八幡神社（和田山町物部）、釣坂遺跡（同町桑市）、立脇廃寺（同町立脇）、薬師前遺跡、伊由神社前、「由坂道」（伊由峠）、越田宮之前遺跡（山東町越田）、柿坪遺跡（同町柿坪）、朝来市埋蔵文化財センター	・『播磨国風土記』神前郡粟鹿川内条の伝承、及び播磨と但馬を結ぶ「古道」の実態調査のため、朝来市教育委員会の田畑基氏、朝来市和田山町与布土まちづくり協議会メンバー３名の案内のもと、以下の遺跡、交通路を現地調査した。 ・朝来市和田山町付近及び円山川流域の古代道路遺構、それと「由坂道」（伊由峠）との密接な関連性を実感することができた。参加メンバーからは、『粟鹿大神元記』に載る「由坂道」が、従来いわれる遠坂峠（但馬・丹波国境）ではなく、むしろ伊由峠である可能性が高いとの意見がだされた。また、山東町一帯には、古墳時代の重要遺跡が集中的に存在することを確認できた。 （調査者：坂江渉コーディネーター、古市晃研究員、高橋明裕研究員、村上泰樹研究員、大平茂研究員）

2　たたら・製鉄研究班

調査日	調　査　地	調　査　内　容
３／19	佐用町内の古代の製鉄関連遺跡（永谷遺跡、山平Ｂ遺跡、本位田高田遺跡）	中世～近世の西播磨の製鉄の歴史を深める目的で、佐用町内の古代の製鉄関連遺跡の巡見調査、及び現地研究会を行った。 ・佐用町教育委員会の文化財調査室において午前中、現地研究会とたたら製鉄に関する「瓜生原文書」の調査を行った。 ・午後、製鉄関連遺跡の現地調査 共同研究員の藤木透氏の案内のもと、村上泰樹報告に関連する風土記の「中川里」比定地付近の「新宿廃寺」～佐用町の「永谷遺跡」～山平Ｂ遺跡～本位田高田遺跡～佐用都比売神社（式内社）などを巡見した。 ・遺跡調査を行うことにより、古代の製鉄が、各丘陵のＶ字谷の渓谷を人為的に平らげ、そこを通る風と、近くの水を利用して行われる、という共通項的な要素を実感することができた。 （調査者：藪田貫室長、坂江渉コーディネーター、山下史朗副課長、田路正幸研究員、伏谷聡研究員、村上泰樹研究員、藤木透研究員）

平成28年度　ひょうご歴史研究室　現地調査一覧

1　播磨国風土記研究班

調査日	調　査　地	調　査　内　容
４／14	小宅神社（たつの市龍野町宮脇）、赤井堰取水口（同市誉田町誉）、太子の御手洗いの井戸（同町内山）、式内社阿宗神社（同町広山）、公夏神社、浄心寺、中世山陽「筑紫大道」跡、太子町歴史資料館	『播磨国風土記』揖保郡小宅里、麻打山、広山里条等の神話・伝承の内容理解を深めるため、現地フィールド調査と関連資料の収集を行った。 ・関連する地域を徒歩で調査したため、それぞれの地形環境や水かかり、立地条件、旧道「筑紫大道」と寺院・神社の位置関係等を確認できた。 ・小宅神社については、もともとは「八幡宮」と呼ばれていたこと、内山の鎮守神「建速神社」が地元では「荒神」と言われていることを聞き取り調査等により確認できた。 ・太子町歴史資料館で、太子町域の古図等を載せる資料を入手した。 （調査者：坂江渉コーディネーター）
５／５	円応寺観音堂（佐用町円応寺）、新宿墓地宝篋印塔、高蔵寺、鵤荘絵図に「三宅」地名が載る太子町鵤西交差点付近他、同絵図に「大伴」地名が載る太子町矢田部公民館付近、丁・柳ヶ瀬遺跡（姫路市勝原区丁の前田橋附近）	『播磨国風土記』の伝承と中世赤松氏に関わる研究を深めるため、佐用町・太子町・姫路市勝原区内の関連する遺跡等の現地調査と資料調査を行った。 ・佐用町内：赤松氏関連の「円応寺」では中世の宝篋印塔（伝・赤松一族、佐用三郎兵庫介範家供養塔）、寺院礎石、寺域塔を調査した。また新宿墓地宝篋印塔（県指定文化財）については「嘉慶２年（１３８８）」造立刻銘や「中津河」の地名等を確認した。これらを通じて各遺跡・寺院等の立地条件、旧道との関わり等を掌握できた。 ・太子町、姫路市勝原区：『播磨国風土記』の開発伝承に関わる地域や遺跡等を視察し、当該地域の地形環境分析に向けての手がかりをつかむことができた。（調査者:坂江渉コーディネーター、大村拓生研究推進員）
６／２	淡路市立津名図書館、古津路銅剣出土地（南あわじ市三原町古津路）、松帆銅鐸出土推定地（同町松帆）、中の御堂銅鐸出土地、式内社「湊口神社」（同町湊）、木戸原遺跡（同町志知）、生石（出石）神社（洲本市由良）	『古事記』『日本書紀』の淡路島古代史、及び松帆銅鐸等を中心とする発掘成果の分析を深めるため、淡路市教育委員会（伊藤宏幸教育次長、工藤祥子主事）と南あわじ市教育委員会（定松佳重課長補佐）の支援を得て資料調査と現地調査を行った。また地元研究者の海部伸雄氏も同席し、資料をめぐる助言を得た。 ・津名図書館『淡路温故之図』調査知見：資料形態はタテ３９．９㎝×ヨコ８２，７㎝の折り本、製作年月日等不明、旧榎列村の古典古美術商廣益堂から一括購入した資料群の一部。資料裏側の貼り紙に「榎列村安富廣益堂／惜無年代記入」の書き込み有り。絵図の中には松帆銅鐸出土附近の海岸線・砂嘴・入り海等が詳細に描き込まれているが、今後、資料の歴史性の吟味を含めたより一層の分析が必要と思われる。 ・西淡町内の銅鐸・銅剣の出土地、湊口神社の巡見調査を行い、この附近の地形環境の一端を知ることができたのは有益であった。５世紀代の豪族居館「木戸原遺跡」など興味深い古代遺構も発見されており、今後、あわじ市教育委員会との連携研究が不可欠となると思われる。 （調査者：坂江渉コーディネーター、村上泰樹研究員、古市晃研究員、大平茂研究員、垣内章研究員）
７／22	上伊勢古墳群（姫路市林田町）、「伴善男の墓」伝承地（同市林田町）、風土記の「大法山」比定地（同市勝原区朝日山）、神功皇后の「船つなぎ岩」伝承地（同市勝	『播磨国風土記』揖保郡条の姫路市内の遺跡、史跡及び大津茂川流域の中世史研究を深めるため、姫路市教育委員会の大谷輝彦氏の案内のもと、資料調査・現地調査を行った。 ・姫路市大津茂川流域の風土記～中世の遺跡、史跡の分布状況を把握することができた。特に風土記のアフコ田・上筥岡の比定地附近の地形環境の状況を、戦後直後の米軍空撮資料なども参考にして現地調査できたことは大きな収穫だった。 （調査者：坂江渉コーディネーター、大村拓生研究推進員、高橋明

	原区朝日谷)、「アフコ田」比定地（同市勝原区山戸)、「上筥岡」比定地（同市勝原区熊見)、「辺作遺跡」(同市大津区天満)	裕研究員、垣内章研究員、大平茂研究員、藤木透研究員、大谷輝彦研究員)
８／31	淡路県民局県民交流室、淡路文化史料館、洲本藩・旧益修館庭園、洲本城跡	淡路島での調査研究の展開のため、「日本遺産」推進事業を担当する淡路県民局県民交流室を訪問して、今後の連携関係のあり方について協議し、また淡路文化史料館等を訪問して、「日本遺産」をめぐる展示内容と、洲本市内の文化財の案内・説明を受けた。 （１）淡路県民局県民交流室での協議内容 ・吉野康之氏（未来島・渦潮参事)、吉井崇行氏（淡路青年会議所・日本遺産推進会議議長)、本名佑至氏（伊弉諾神宮権禰宜）が対応。 ・藪田室長が昨年度来のひょうご歴史研究室の事業内容を、坂江コーディネーターが「播磨国風土記」研究班作成の「淡路古代史の調査研究と普及啓発事業（案)」について説明し、その後、意見交換を行った。 ・吉野参事　今回認定された日本遺産の構成文化財や「国生み」神話については、しっかりした学術調査研究が必要と考えていたので、今後、関係機関、関係者と協議した上で、連携関係のあり方や、調査研究の持ち方等を具体化していきたい。平成29年５月に北前船サミットを開催するので、いろいろと教えてほしい。 ・本名権禰宜　伊弉諾神宮の神像や歴史資料について、かつて県立歴史博物館の協力を得て調査した経験もあり、今後、積極的な共同研究を望む。 ・吉井議長　今年度の啓発事業はすでに具体化しており、その詳細案を後日通知する。 （２）淡路文化史料館等の調査・訪問 ・岩熊隆之氏（洲本市教育委員会文化・スポーツ課長）と挨拶の後、堂角田龍治氏（淡路文化史料館長)、金田匡史氏（文化・スポーツ課文化振興係長）が対応 ・「播磨国風土記」研究班の淡路島での調査事業の説明と協力依頼をした後、堂角田・金田両氏の案内で、淡路文化史料館の「日本遺産」展示コーナーを見学 ・その後、館外に出て、洲本藩・旧益修館庭園（現在発掘整備中）及び洲本城跡も見学した。 （調査者：藪田貫室長、豊田幸雄副室長、坂江渉コーディネーター、山下史朗県教委文化財課副課長)
11／19	大年神社、那珂ふれあい館、多可廃寺跡、思い出遺跡､石原坂峠、極楽寺、安海寺、鹿子神社、小野尻峠	『播磨国風土記』の志深ミヤケ伝承、及び加古川流域の蘇我氏の動きを究明するため、多可町教育委員会の協力を得て、多可町内の関連遺跡、神社仏閣等を現地調査した。 ・調査前に、安平館長から事前レクチュアを受けて現地入りしたため、町内の7世紀代を中心とする古代地域史の特徴を明確に把握することができた。杉原川流域の多可町地域と、加古川本流地域との合流場所のあり方を、従来とは異なる視点で考えられるきっかけを得た。 ・今後、西脇市地域の古墳の現地調査など、加古川本流域の古代史の特徴を掴む必要がある。 （調査者：坂江渉コーディネーター、村上泰樹研究員)
12／21	西脇市郷土資料館、寺内古墳群（同市坂本)、西林寺（平安時代後期の十一面観音)、岡ノ山古墳群（同市	『播磨国風土記』の志深ミヤケ伝承、及び加古川流域の蘇我氏の動きを究明するため、多可町内の関連遺跡、神社仏閣を訪問した11月19日の現地調査に引き続き、隣接する西脇市内の古墳、寺院、史跡を調査した。現地案内は西脇市教育委員会の西脇市郷土資料館職員の菅澤敏弘氏。

	上比延町)、兵主神社(県指定の拝殿あり)(同市黒田庄町岡)、石原坂手前の道標(同町石原)、旧石原坂の鞍部、下山古墳(同市日野町)	・菅澤氏から、現在の西脇市の市街地付近は、低湿地、氾濫原等にあたり、古代においては旧多可郡域の中心域ではなく、むしろその東側の「津万」「比延」地区の小盆地が有力との見解が示され、現地調査では、「津万」「比延」地区の重点調査を行った。このうち「岡ノ山古墳群」のある「岡ノ山」(＝日本ヘソ公園あたり)は、武庫川流域の交通路と、篠山市の「味間」(大国寺)とを結ぶ道との交点に所在するという、交通要衝地であるとの見通しを得た。 ・多可町と西脇市を結ぶ古道としては、西脇市の石原～多可町の安田を結ぶルートのほか、西脇市の津万井～日野町とを結ぶルートも有力との認識を得た。 (調査者：坂江渉コーディネーター)
1／18	大国寺(篠山市味間奥)、丹波市教育委員会文化財課、丹波市立植野記念美術館(丹波市氷上町)青玉神社(多可町鳥羽)、式内社佐地神社、七日市遺跡(春日町)	『播磨国風土記』の志深ミヤケ伝承、及び加古川流域の蘇我氏の動きと交通路との関係性を究明するため、播磨・丹波国境付近の篠山市・西脇市・多可町・丹波市の関連史跡、遺跡等の現地調査と、関連する資料や情報の収集活動を行った。 ○丹波市教育委員会文化財課では、「氷上回廊」にかかわる　資料収集を行った。 ○丹波市立植野記念美術館では、学芸員の徳原氏から、播磨－丹波国をまたぐ古道についての情報提供を受けた。 ・徳原学芸員から、播磨の多可町中町地区から丹波国氷上郡(西県地区)に向かう古道として、３つの可能性があるとの情報を得た。一つは、中町牧野～小野尻峠～山南町和田のルート。二つ目は、中町安田～石原坂～黒田庄町石原のルート。三つ目は、中町安楽田～杉原～播州峠～青垣町佐治のルート(その変則版として杉原川流域の加美町清水～清水坂～氷上郡三原のルートもあるとのこと)。 ・今後、古代の古墳や遺跡分布状況を踏まえて、交通路の復元が必要との認識を深めた。 (調査者：坂江渉コーディネーター)

2　赤松氏と山城研究班

調査日	調　査　地	調　査　内　容
5／25	上郡町教育委員会、赤松館跡・五社八幡宮・栖雲寺跡	上郡町教育委員会の島田拓氏の案内のもと上郡町「赤松館」と周辺遺跡の現地視察。上郡町教育長 三木一司氏に歴史研究室と「赤松氏と山城研究班」の概要説明と協力依頼。 ・ 赤松居館跡、五社八幡社(上郡町赤松) ・ 栖雲寺跡(上郡町赤松) (調査者：藪田室長、坂江渉コーディネーター、大村拓生研究推進員)
6／22	上郡町役場、上郡町郷土資料館	上郡町史編纂時の収集資料の現況と内容に関する調査 ・上郡町役場：上郡町史編纂時の収集史料の現況を確認し、『上郡町史編纂資料目録集』33冊の存在を確認。 ・そのうち、町に寄託されている河野原自治会文書、及び文書のコピー製本が所蔵されている、内閣文庫・宮内庁書陵部所蔵の赤松氏関連史料、町内の赤松自治会蔵文書・河本稔家文書・高谷直晴家文書・野桑区文書を上郡町郷土資料館特別展示室に移動した。また『上郡町史編纂資料目録集』において郷土資料館蔵とされる絵図が役場内に所蔵されていたので郷土資料館に移すよう島田拓研究員に要請した。 ・郷土資料館に移動した文書・コピー製本及び目録から赤松氏関連遺跡に関する史料について確認する作業を行い、赤松自治会蔵文書から『上郡町史』に収録されていない関連文書を多数発見した。 (調査者：坂江渉コーディネーター、大村拓生研究推進員)

７／１	上郡町郷土資料館	上郡町史編纂時の近世文書のコピー製本を閲覧して関連する資料を収集 ・上郡町郷土資料館特別展示室にて町史編纂時に収集された近世文書の写真帳を閲覧した。 ・その中で、赤松自治会文書の未確認部分から宝林寺関連文書を確認し、三木城籠城の由緒をもち赤松村大庄屋甚右衛門家を継承し延宝検地帳・宗門改帳・白幡八幡宮をめぐる相論文書などを伝える河本稔家文書、赤松村で活発な経済活動を営んだ武左衛門家を継承し赤松村明細帳を伝える高谷直晴家文書、赤松村庄屋を務めた徳左衛門家を継承し赤松円心五百回忌法要文書を伝える藤本裕一家文書を閲覧し、必要部分をコピーした。これにより赤松村関係の文書群の大要については確認することができた。 ・限られた時間内では作業を完了することができなかったため、宝林寺の立地する河野原区有文書を借用した。また今回閲覧が叶わなかった絵図類については秋までに調査を進めることとした。 （調査者：大村拓生研究推進員）
８／10	上郡町郷土資料館	上郡町郷土資料館所蔵の近世・近代絵図について熟覧し検討した。 ・赤松氏関連史跡が所在する　１７－１９－１「黒石村絵図」・１７－１９－４「赤松村地図」・１７－１９－５「苔縄村地図」・１７－１９－６「河野原地図」・１７－１９－９「赤松村切図」・１７－１９－１２「尾長谷地図」・１７－１９－１３「野桑大地図」・１７－１９－１５「金出地村惣絵図」・１７－１９－１８「大富村全図」（番号は『上郡町史編纂資料目録集』第３号に拠る）を実見し、実測と熟覧・検討を行った。 ・白旗城などの山城部分については特に重要な情報が得られなかったが、10月から発掘予定の赤松屋敷跡についてはその詳細な地割りを確認することができ、明治初期の赤松村の集落と街路の様相を確認するとともに、地形環境について考える手がかりを得ることができた。 ・その他に白旗城で表面採取された遺物を実見するとともに、今後の研究班の進め方についても研究員相互の共通認識を深めることができた。今後はそれ以外の絵図についても閲覧・検討を行っていくこととした。 （調査者：大村拓生研究推進員、小林基伸研究員、山上雅弘研究員、島田拓研究員
８／27	太子町歴史資料館、教興寺（太子町蓮常寺）、太子町岩見構公民館付近、石見神社(たつの市御津町中島)、船渡八幡神社（姫路市網干区余子浜）、魚吹八幡神社（姫路市網干区宮内）、	播磨国風土記研究班及び赤松氏と山城研究班の合同事業として、揖保川下流域の史跡現地を踏査。 ・太子町立歴史資料館で資料調査。開会中の企画展「『鵤庄引付』の世界－室町・戦国時代の日々－」を見学し、揖保川下流域の文献・歴史地理的環境についての知見を深めた。 ・太子町蓮常寺の赤松期の禅宗寺院蓮城寺の故地と考えられる「教興寺」周辺を踏査し、方形区画を発見することができた。 ・赤松期の守護代館が置かれたと考えられる「太子町岩見構」を踏査し、堀状の窪み・土塁状の高まりを複数箇所で発見することができた。 ・古代石見郷の名前を残すたつの市御津町中島の「揖保石見神社」を踏査し、周辺の地理的環境についての知見を深めた。 ・中世余子浜の故地である姫路市網干区「余子浜」を踏査し、神功皇后を祭神とする船渡八幡神社及び周辺の湊の故地及び街路の状況を確認することができた。 ・播磨国風土記に名前のみえる網干区宮内の「魚吹八幡神社」を踏査し、周辺のラグーン状の地形を確認することができ、その立地

		の意味についての知見を深めた。 （調査者：坂江渉コーディネーター、大村拓生研究推進員、高橋明裕研究員）
９／６	赤穂市史編纂室、 赤穂市中央公民館	赤穂市史編纂室に寄託されている上郡町域の近世絵図について熟覧し検討をした。 ・赤穂市教育委員会生涯学習課市史編纂担当課長小野真一氏の許可を得て、編纂室に寄託されている有年原自治会所蔵の文書、絵図の調査を、赤穂市中央公民館（市民会館）内の市史編纂室、及び会議室で実施した。 ・まず赤穂市史編纂室作成の有年原自治会所蔵文書目録を閲覧し、文書群全体の状況を把握するとともに、関連する可能性のあるいくつかの文書のコピーを閲覧したが、特に重要な手がかりを得ることはできなかった。 ・続いて上郡町域の１大酒村・２細野村・３大杉野村・４a～b休治村・５a～h佐用谷村・６與井村・７a～c苔縄村・８a～d與井新村・９a～c中野村・１０a～b新山寺村・１１a～b宇野山村・１２a～f赤松村絵図、１３小赤松村と大酒村・１４下村・１５河野原村（番号は赤穂市史編纂室の整理番号八－１８－１２－２有年原自治会蔵文書の絵図・上郡町域の枝番）の絵図を法量測定・写真撮影を行い，熟覧して全体状況を把握した。 ・１０月から発掘調査予定の赤松村に関しては、甦る上郡実行委員会編集発行『村絵図の世界』に掲載されている絵図以外に４枚の存在を確認。 他の村絵図との関係から作成状況を把握・図録に記された絵図の年紀に誤りがあること、未掲載の絵図で発掘予定地の「円心ヤシキ」の周辺が「家居」と彩色されているのと異なり「田畑」となっていることを発見した。 絵図相互で家並みの状況が相違していることを確認など、今後に向けて重要な知見を知ることができた。 （調査者：大村拓生研究推進員、小林基伸研究員）
10／20	赤松居館跡、白旗城跡、上郡町郷土資料館	上郡町で実施されている赤松居館跡確認調査の現状を視察するとともに、白旗城の縄張りについて確認し仮測量を実施。 （１）上郡町教育委員会教育総務課文化財係学芸員島田拓氏の案内で、上郡町が実施している赤松居館跡館確認調査の現状を視察した。 （２）視察した調査区二カ所では関連する遺構・遺物は出土せず、大規模に削平した可能性が想定される。ただし、地層の現状から山側からの堆積の様相について確認することができ、今後の調査区の設定について山上研究員から助言が加えられた。 （３）続いて白旗城に登山し、本丸など主要部について縄張りを確認するとともに、仮測量を実施した。 （４）また侍屋敷と称される部分を視察・測量したところ、備前焼など中世遺物を採取することができ、庭園跡と思われる遺構も見られたが、通常は多数見つかるはずの土師皿は確認できなかった。ただし、石垣遺構も複数残されており、当該部分が１５世紀にさかのぼる可能性が高く、白旗城の機能を考える点で重要な施設であるとの認識を得た。 （５）下山して上郡町郷土資料館で昭和５６年に実施された赤松居館跡での調査時の遺物・写真を実見し、当時は近世とされたが中世の青磁・京都系土師皿などを確認することができ、今後の調査の方向性について議論した。 （調査者：大村拓生研究推進員、山上雅弘研究員、）

11／16	赤松居館跡、大枝城跡	上郡町教育委員会教育総務課文化財係学芸員島田拓氏の案内で、上郡町が実施している赤松居館跡確認調査の現状を視察するとともに、白旗城の関連とされる大枝城について確認。 （１）全体としては大規模な削平が認められ、50年前に重機で掘り返したとの証言も得られたという。そのため全トレンチ１１ヶ所のうち、６ヶ所からは明確な遺構面を確認することができなかったが、西側の５ヶ所からは最下層と思われる柱穴や礎石とみられるものや、中世段階での整地の痕跡などが検出され、実見した。 （２）遺物はコンテナ10箱で、整地によってつぶされた土師皿が多数出土し、青磁１点・北宋銭「聖宋元宝」１点・備前焼の瓶などが出土し、山上研究員により１４・１５世紀の物であるとの判断が示された。また生活遺跡ではみられる鍋・釜が出土せず、居館跡である可能性がきわめて高いとの見解も示された。 （３）今後は遺物の洗浄をすすめるとともに、来年度は遺構が確認できた西側について、面的な調査区を設定する方針について確認した。 （４）ついで現地で城跡であるとの伝承があり、縄張図も書かれている大枝城を踏査した。北は佐用・宝林寺、南は山里・船坂・杉坂が眺望できる立地であることは確認できたが、人工的な縄張りの存在を視認することはできず、城郭とみることはできないとの、山上研究員の判断が示された。 （調査者：坂江コーディネーター、大村拓生研究推進員、山上雅弘研究員）
12／７	たつの市神岡町椰八幡宮、同市大住寺の大源寺地区、鶴嘴山里公園、太子町蓮常寺の教興寺、同福地の了源寺、同岩見構の蓮生寺	揖保川流域の禅宗寺院跡及び守護代関連施設跡と考えられる場所を踏査・確認した。 （１） 禅宗寺院金剛寺が立地していたと思われるたつの市神岡町沢田の椰八幡宮（神岡八幡）及び背後の椰獅子の丘を踏査、山上にいくつか平坦面が存在していること、揖保川を臨む景観についての知見が得られた。 （２） 禅宗寺院大義寺の立地していたと思われる神岡町大住寺の大源寺地区及び、背後の鶴嘴山里公園を踏査、周辺で瓦・土器などが見つかったとの現地での証言が得られるとともに、いくつかの平坦地の存在を確認するとともに、西に揖保川に開かれ、三方を山に囲まれた景観についての知見を得られた。 （３） 禅宗寺院である石見連城寺・石見竜源寺が立地していたと思われる、太子町蓮常寺の教興寺、同福地の了源寺、太子町岩見構の蓮生寺を踏査、決定的な証拠は得られなかったが現在は浄土真宗寺院になっているが、それ以前から寺院が存続していたとの寺伝の存在を確認した。 （４） 守護代館が立地していたと考えられる太子町岩見構の微地形について確認、堀状のくぼみ・土塁状の高まりを確認するとともに、現在は田と利用されている現集落北側の地域の小字が鎌屋敷であることがわかった。 （５）たつの市揖保町西構も踏査したが、現状では館の痕跡は確認できなかった。 （調査者：大村拓生研究推進員）
1／11	姫路市網干区龍源寺、恵美酒神社、大覚寺	姫路市網干区の海浜集落の地形環境と寺院の立地について踏査･確認。 （１） 網干区浜田について、東西を貫く砂堆の微高地上を室津海道が通り、中心集落が展開していること、浄土真宗寺院龍源寺はその南の低地に立地しており、従来比定されている室町期の禅宗寺院としてはふさわしくなく、戦国時代の真宗展開以前に遡らせることは考えにくいことを確認した。また、南に向かって徐々に下がっており南面する恵美酒神社は海岸に立地していたと想定できることを確認した。 （２） 網干区興浜について、室津海道が浜田集落を東に抜けたとこ

1／11	姫路市網干区龍源寺、恵美酒神社、大覚寺	ろから落ち込みがあり、地名標記が興浜に変わっていることから、かつて揖保川がそこを流路としていた時期があることを確認した。 揖保川東岸では浜田と同様に東西を貫く室津海道沿いがもっとも微高地上にあり、南に向けてゆるやかに下がっていく地形で、戦国期に再興されたと伝わる大覚寺もそこに立地していることを確認した。 （３） 網干区新在家について、以前に存在していた興浜との境界、室津海道の意図的な屈曲を踏査し、地形的にも興浜よりやや低くなっていることを確認した。 （４） 網干区大江島について、やはり東西を貫く室津海道沿いの微高地に集落が展開していることを確認した。 （５） 以上から、揖保川河口部の海浜集落が東西に長い砂堆上に展開し、戦国期に進出した寺院がその南の低地に立地しているという特徴を確認した。 （調査者：大村拓生研究推進員）

3　たたら・製鉄研究班

調査日	調　査　地	調　査　内　容
４／27	宍粟市波賀町小野段林遺跡、赤西Ａ遺跡、音水鉄山跡・金山神社、千種町岩野辺の荒尾鉄山、とりが山のかんな流し跡、三方町公文のもみの木鉄山跡、溝谷遺跡	たたら・製鉄研究班が、中世～近世の西播磨の製鉄の歴史を深める目的で、宍粟市波賀町などに残る、中世～近世たたら・製鉄関連遺跡を地元市教委の田路正幸氏の案内で調査した。 ・小野段林遺跡（中世初頭の遺跡と推定）：宍粟市波賀町　小野 ・赤西Ａ遺跡（17世紀初頭以降に操業と推定）：波賀町原 ・音水鉄山跡・金山神社（波賀町音水） ・荒尾鉄山跡～鳥ヶ山のかんな流し跡（千種町）～もみの木鉄山跡 などを巡見した。今回の調査は、近世たたら場遺構の現地調査を中心としたが、ほとんどの遺構では共通して石組みの平地（テラス）や、近くに２本以上の河川が交差する場所があるなど、近世播磨のたたら現場の地形環境の特徴を見いだすことができた。また島根県（出雲）の菅谷のたたら場の地形特徴とも類似性をもつとの印象を持った。これらの現地調査を踏まえた上で、今後、文献史料の調査研究をすることの重要性が確認された。 （調査者：坂江渉コーディネーター、大槻守研究員、村上泰樹研究員、田路正幸研究員、伏谷聡研究員、笠井今日子研究員、大村拓生歴史研究推進員）
12／７	平瀬氏宅、平瀬神社（千種町河呂）、荒尾鉄山跡（同岩野辺）、宍粟市歴史資料館	来年度、本格的な資料調査をおこなう予定のたたら関連資料の概略調査をするために、宇野正碌氏収集資料の実見調査をおこなった。午前中、平瀬家文書に関連する千種町河呂の平瀬神社、千種町岩野辺の荒尾鉄山跡の巡見をおこない、午後、宍粟市立歴史資料館にて宇野正碌氏収集資料の調査を実施した。 ・宇野正碌氏の収集資料の目録作りを担当された大谷史郎さん（宍粟市臨時職員）の立ち会いの下、調査研究ノート、写真アルバム、資料コピー等の実見するとともに、「千草屋手控帳」資料コピーの写真撮影を行った。 ・宍粟郡の鉄山をめぐる既存研究成果の基本的な史料は、宇野氏が収集したもので全部出揃っているという感を得た。鉄山周辺寺院の「過去帳」や墓標名調査による鉄山名の割り出し作業には感服させられるものがあった。 ・今後の研究の方向性としては、①平瀬家文書、②大坂泉屋文書、③生野代官所に関連する史料の調査が重要との意見がだされた。 （調査者：藪田室長、坂江渉コーディネーター、大槻守研究員、田路正幸研究員、伏谷聡研究員）

執筆者紹介

・藪田　貫（やぶた・ゆたか）
ひょうご歴史研究室長
（兵庫県立歴史博物館長）

・大村　拓生（おおむら・たくお）
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員

・小林　基伸（こばやし・もとのぶ）
ひょうご歴史研究室客員研究員
（大手前大学総合文化学部教授）

・島田　拓（しまだ・ひろし）
ひょうご歴史研究室共同研究員
（上郡町教育委員会教育総務課総務・文化財係学芸員）

・山上　雅弘（やまがみ・まさひろ）
ひょうご歴史研究室研究員
（兵庫県立考古博物館事業部学芸課担当課長補佐）

・三木　一司（みき・かずし）
上郡町教育長

・坂江　渉（さかえ・わたる）
ひょうご歴史研究室研究コーディネーター

・古市　晃（ふるいち・あきら）
ひょうご歴史研究室客員研究員
（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

・垣内　章（かきうち・あきら）
ひょうご歴史研究室客員研究員
（播磨学研究所研究員）

編集後記

平成二七年（二〇一五）四月の開設以来、ひょうご歴史研究室の事業も、二年目に入りました。三つの研究テーマのうち、今年度は、「赤松氏と山城」研究を重点的に推進し、大手前大学史学研究所とのシンポジウムの共催や、本誌特集号の刊行など、いくつかの成果を上げることができました。

また『播磨国風土記』研究も引き続きおこない、県立考古博物館での「三条西家本」風土記の全巻特別陳列の開催や、本誌の『播磨国風土記』と古代史研究」コーナーの論考などが、その成果の公表となります。

それぞれの分野において、ご協力賜った数多くの方々や関係機関に、厚く御礼申し上げます。

来年度は、いよいよ「たたら製鉄」研究を本格的におこない、同様の成果を得たいと思います。関係者の皆様のご支援を、心よりお願いする次第です。

（坂江　渉）

ひょうご歴史研究室紀要　第二号

平成二九年（二〇一七）三月二四日発行
編集・発行　兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
（編集担当・坂江渉、大村拓生、川戸信雄）
〒六七〇-〇〇一二　兵庫県姫路市本町六八番地
電話　〇七九-二八八-九〇一一
HP　http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekiken/
印　刷　合名会社　柳生印刷所
〒六七一-一五六一　兵庫県揖保郡太子町鵤五六八
電話　〇七九-二七六-〇〇四八